

よりよい家庭生活を主体的につくりだす子どもを育てる 家庭科学習指導

—意思決定を促す情報解釈力を身に付ける学習過程の工夫を通して—

The study of a method of Home Economic guidance for acquiring
ability of improving family life

— The process of decision making for information interpretation —

岡 佐智代

Sachiyo OKA

(福岡教育大学附属久留米小学校)

(平成25年9月30日受理)

要 約

今、日本は、東日本大震災によるエネルギー問題や少子高齢化、環境問題を抱えている。そのような問題に対して人ごとではなく、自分のこととして主体的に考え、「じっくりと考える」ことが大切になってきている。つまり、情報を吟味して理論立てて考えること、複雑な状況を整理して問題への方策を探求することが重要であり、問題解決のプロセスを理解し、それを実践する能力が必要となっている。

そこで、家庭科では、生活の問題点や矛盾に気づき、自分の生活をよりよく変えていこうとする力を育むことを目指している。そのためには、主体的な意思決定能力の育成が重要であると考えた。子どもの発達段階を踏まえ、具体的な意思決定の場面から生活の価値項目を設定させる。

キーワード：意思決定プロセス、問いかけ、批判的思考、シミュレーション

I. 主題設定の理由

1. 社会の要請から

東日本大震災により、人々が憧れ、目指した「便利な生活」は、脆弱で未来にはつながらないものであることが明らかになり、多くの人々が愕然とした。さらに、「普通に生活することのありがたさ」を被災地の人も遠くから離れた人も強く感じた。この未曾有の大震災の経験は、家庭生活は自分と家族、近隣の人々とのかわりによって、よりよい生活をつくり出していることを再認識させた。

また、持続可能な社会を築いていくには、何をどう考え、どう行動するのか、まさに「生きる力」が問われている。また、先進国としての日本は、少子高齢化、環境問題など様々な課題へどう対応していくかが求められている。

子どもたちの生活においても、家族のそれぞれが好みの物を食べる個食、一人で食事をする孤食が増え、それは、偏食を増長し、家族とのつながりが希薄になっている。

さらに、技術・家庭における基礎・基本となる知識・技能の実現状況及び、基礎・基本となる知識を生活の中で活用して、生活を工夫し創造する力の状況に焦点

をあてて、国立政策研究所が、平成19年10月9日に中学校第3学年を対象に行った。

この調査で注目したのが、「さつま汁（豚汁）を作るとき、全ての材料が同じくらいの時間に火が通るようにするための切り方の工夫」について記述する問題である。結果は資料1のとおりである。この野菜の切り方の学習は、小学校段階でも「三色野菜いため」の材料の切り方や「みそ汁」の実の切り方で学習している。しかし、正答できているのは、36.7%である。

資料1 さつま汁での材料の切り方と工夫

	解答類型	反応率
1	固いものは薄く（細かく、小さく）切ることを記述している。	◎ 36.7
2	大きさを揃えることを記述している	16.8
3	固いのを先に入れることを記述している	5.9
4	固いものは、「切れ目」を入れることを記述している。	0.8
5	上記以外の解答（厚さを変える、同時に入れるなど）	31.7
6	無解答	8.1

(解答類型ごとの正答率)

正答◎

度学習したことが子どもたちに確かな技能として身に付いていないことが分かる。

原因としては、日常に必要な基礎的・基本的な知識及び技能の習得と実感を伴った理解ができていないことが考えられる。また、一つの題材内で繰り返し学習(実践的・体験的な活動)することが行われていないことが分かる。

このようなことから、2年間を見通した年間指導計画を作成し、1つの題材内での実践的・体験的な活動を繰り返す題材構成の工夫が必要になってくる。

2. 本校家庭部の研究の歩みから

本校の家庭部では、『家庭生活を高める子どもを育てる家庭科学習指導』を主題とし、課題を解決する方法を目的をもって、実践的・体験的な活動を通して、分かったことを絵や図などを使って友だちに紹介し合う言語活動を通して主題の具現化を図ってきた。

そこで、次のような成果と課題が明らかになった。

- 生活における様々な言葉(ひと煮立ち、沸騰など)を実習を通して実感を伴って理解することができ、生活への感性を高めることにつながった。
- 実習(製作や調理)や観察などを行った後、絵や図、写真、実物、言葉などを使って分かりやすく紹介し合う言語活動を通して、友だちと比較したり関係づけたりして新たな方法を考え出し、その方法を使って家庭実践に結び付けることができた。
- 継続して自分の生活の課題にかかわることができないのは、子どもたち一人一人が、自分の生活を見つめ、課題を見付け、その課題から根拠をもって問題解決をした学習になっていなかったからではないかと考えられる。
- 家庭に合わせた創意工夫をするために意思決定を行う段階で、友だちに意見に流され、批判的に検討し、決定することができていない。

3. 本校の子どもの実態から

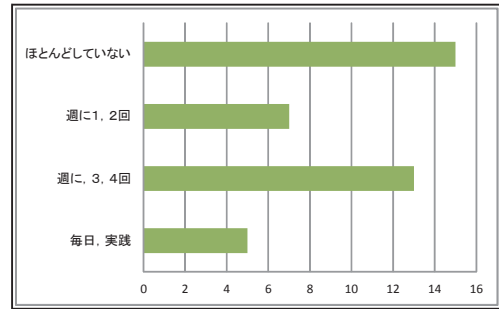
家庭科の学習で身に付いた基礎的・基本的な知識や技能を継続して、今も行っているのかを調査を行った。

- ・調査日 平成25年7月18日(木)
- ・対象 附属久留米小学校 第6学年児童
- ・方法 これまでの家庭科の学習で学んだことを家庭実践しているか自由記述させた。

資料2は、5年生からこれまでの学習を活かして、日常生活において、何か家庭実践をしている子どもは、40人中25人で62.5%であった。何もしていないという子どもが、15人おり、理由を尋ねると資料3のようであった。

子どもたちは、自分の時間、ゆっくりする時間がほしいと思い、家族の一員だということを実感できていない。よりよい家庭生活をつくり出すために、主体的に家族のために「役に立ちたい」「何かしてみたい」と

資料2 家庭実践に関するアンケート



資料3 家庭実践をしない理由

- 家族にさせてもらえない。
- 何かする時間がない。
- 何をしてもいいかわからない。
- 自分の時間、ゆっくりする時間がほしい。

資料4 実践している内容(複数回答あり)

家庭実践の内容	割合
○卵料理, 野菜のための調理	58%
○ご飯やみそ汁の調理	42%
○簡単な調理やおかずづくり	33%
○お茶を入れること	30%
○おやつづくり	12%
○整理・整頓, 掃除	34%
○洗濯やアイロン	11%
○その他	5%

資料5 子どもたちの感想(自由記述)

- 友だちや家族に食べてもらって「おいしい」と言われたのが嬉しかった。いろいろな料理を自分で作れるようになりたい。
- 自分の庭にあるトマトを使って毎日何かを作っている。家族の役に立っているのが嬉しい。
- 5年生の初めの頃、「できるのかな」ととても不安だったけど、できることが一つ一つ増えるたびに、本当に嬉しかった。家族のために何かしたいと思えた。
- もっと難しいことがやりたい。次はどんなことを学習するのかとても楽しみです。

いう思いを育てることが大切だということが分かる。

資料4は、家庭実践の内容である。たまご料理や野菜のためは、学校で学習したことをいかしてスクランブルエッグを発展させて、具を入れてオムレツを料理したり、野菜のための材料の組み合わせを変えたりして実践していることが分かった。

このアンケートには、家庭実践をしておいた感想を書いてももらった。

- このような結果から次のようなことが考えられる。
- いろいろな技能を身に付け、家族の役に立ちたいと思っている子どもが多くなっている。
- 家庭生活をよりよくするために、基礎的・基本的な知識及び技能をしっかりと習得させる必要がある。

●家庭科の学習で学んだことを家庭生活に活かしていく力、創意工夫する能力が身に付いていない。家庭の様々な状況に対応し、自分のもっている知識や技能を活用していく能力を育成する必要がある。

II. 主題の意味

よりよい家庭生活を主体的につくりだす子ども

1. 主題の意味

(1) 家庭生活とは

家族が、生活の安定向上、自己実現を目指して、近隣の人々などの「人」、衣服や食べ物などの「もの」や「時間」、「金銭」などの要素が相互に関連し合っ
て得られるくらしのことである。

家庭科は、衣食住や家族の生活などの家庭生活に関する内容を主な学習対象としている。子どもたちが家族の一員として近隣の人々や環境とかかわり合うことでより豊かな家庭生活になる。

(2) よりよい生活とは

子どもたちが、現実の自分の生活の中から課題を見付け、身に付けた知識や技能を活用して、生活を少しでもよいものにしようと工夫していくくらしのことである。

よりよい生活を得るためには、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる必要がある。実践的な態度を育てるためには、自ら課題に気づき、解決方法を考え、よりよい生活を目指して解決していく問題解決的な能力を育成する学習過程の工夫が大切になる。

(3) つくり出すとは

衣食住に関して生活を見つめ、何が課題なのか、また、必要な解決方法を異なる視点からじっくりと考え、自分で解決方法を決定し、実践的・体験的な活動を行うことである。

生活に使える情報として発信するために、実践的・体験的な活動を通して、具体的な学習を展開することにより、より確実な知識及び技能を身に付けるとともに、知識や技能を活用して身近な課題を解決したり、家庭での実践を無理なく行ったりすることができるようにする。

(4) 主体的とは

家族に受身的・依存的な生活から、生活の自立をめざし、実践的・体験的な活動を通して身に付けた知識や技能を家族の一員として、自分が生活の中で活用していこうとすることである。

図1のように受身・依存的な部分が多かった子どもたちが、家庭科の実践的・体験的な活動を通して、生活の自立を目指して主体的に変化していく。ここでいう自立とは、できるだけ他の人の世話や指示を受けないで一人立ちすることができるとともに、他の人、家族や近隣の人々などと支え合って生きていくこと(共生)をめざす。図2のように成長と共に依存・受身的部分が少なくなっていく、支え合いや共生が増えていく。



図1 主体的とは

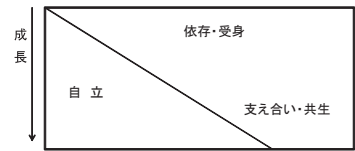


図2 家庭科でめざす自立

図3のように、自立には、精神的な自立・生活の自立・経済の自立の3つの側面がある。家庭科では、生活の自立を中心に学習を進めるが、自分の意見をしっかりとつ精神的な自立と強く結び付いている。

図3のように、自立には、精神的な自立・生活の自立・経済の自立の3つの側面がある。家庭科では、生活の自立を中心に学習を進めるが、自分の意見をしっかりとつ精神的な自立と強く結び付いている。

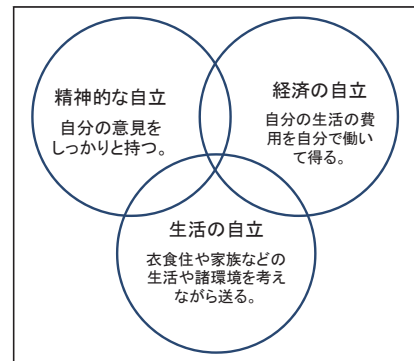


図3 家庭科における自立とは

(5) 主体的につくり出すとは

衣食住に関して生活を見つめ、何が課題なのか、また、自分の意思で解決方法を決定し、実践的・体験的な活動を通して、身に付けた知識や技能を家族の一員として、自分の生活の中で活用することである。

実践的な態度を育てるために、実践的・体験的な活動を通して、具体的な学習を展開することにより、より確実な知識及び技能を身に付けるとともに、知識や技能を活用して身近な課題を解決したり、家庭での実践を無理なく行ったりすることができるようにする。

具体的には、次の子どもの姿である。

- 衣食住や家族の生活などについて関心を持ち、その大切さに気づき、意欲的に家庭生活をよりよくするために進んで実践しようとする子ども
- 家庭生活を見直し、課題を見付け、生活の充実、向上、改善を図るために知識・技能を活用して、家

庭生活をよりよくしようと自分なりに工夫しようとしている子ども

- 日常生活に必要な衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な技能を身に付けた子ども
- 日常生活に必要な衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な知識を身に付け、家庭生活の大切さを理解している子ども。

2 副主題の意味

意思決定を促す情報解釈力を身に付ける学習過程の工夫を通して

(1) 意思決定とは

自分がある目的をもった行動に移行させる前の思考・決定の過程である。

自立した生活を送るために、問題を明確にしたり、目的をもって情報収集したり、適切な価値判断をし、決めるまでの過程（資料6）のことである。

大切になるのは、1度決定したものを「本当にこれでいいのか」と批判的に検討し、決定の再検討を行うこと（資料6⑥）である。このような慎重でよりよい意思決定は、日々の暮らしの中で習慣化され、身に付いていくことにより真の主体的な生きる力につながっていくのである。

意思決定能力とは、

意思決定で得ることができる、子どもたちに備わっている力のことである。

この意思決定能力は、訓練によって向上させることができる。つまり、学習である場面を設定し、子どもたちが集めた情報をもとに、自分で意思決定する場面を何度も繰り返し訓練することができるのである。

(2) 意思決定を促すとは

問題解決行動を日常生活で具体化するために、何をどのようにするか、どのように生活していくか批判的に検討したり、周囲への影響を考えたりすることである。

これから、子どもたちが自立した生活を送っていくことができるようにするために、意思決定プロセスの中に「決定の再検討」をする段階を位置付ける。この「決

定の再検討」段階によって、意思決定に責任をもつという自覚が生まれ、意識的意思決定能力を育成することができる。そのために、自己の思考を批判的にみることや周囲の人やもの、環境への影響を考慮する「共生」の視点からも行っていく。

(3) 情報解釈力とは

「つくる」段階で行う得た情報について、どの情報が必要であるか、また取り上げる価値があるか解決に向けて的確に読み取る力のことである。

家庭科では、情報を

家族の一員として家庭生活をよりよくするために、自分の課題を解決するときに必要な知識及び技能、アイディアのことである。

家庭科における情報は、家族へのインタビューや家族ウォッチング、GTからのアドバイス、友だちとの交流、または実践的・体験的な活動を通して得られる。

(4) 情報解釈力を身に付けるための学習過程とは

「つくる」段階で、問題解決行動を具体化するために、得た情報についてどの情報が必要であるか、また取り上げる価値があるか解決に向けて的確に読み取り、「高める」段階で何をどのようにするか、どのように生活していくかを定めることである。

自分で意思決定するためには、情報を多く集める必要がある。多くの情報を取捨選択して解釈し、課題の解決のために的確に内容を読み取る必要がある。

Ⅲ. 具体的な構想

1. 年間指導計画に基づいた題材構成の工夫

(1) 2年間の年間指導計画

資料7のように、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図り、学習が無理なく効果的に進められるように、2年間に渡って見通しをもって年間指導計画を作成する。

B(3)では、無理なく調理できるものを扱い、自信をもって意欲的に楽しく学習ができるように配慮する。特にゆでたり、いためたりする加熱操作を繰り返し学習できるよう題材を配列し、材料を変えたり調理法を組み合わせたりなどして、平易なものから段階的に題材を発展させながら定着を図ることができるようにする。

なお、材料の分量や手順を考えて調理の計画を立て、簡単なおかずをつくったり、米飯及びみそ汁をつくったりする学習により、2年間を通して1食分の食事を整えることができるようにする。

(2) 題材構成の工夫

確実に基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、家庭に合わせて創意工夫することができるようにするた

資料7 B 日常の食事と調理の基礎の年間指導計画

第5学年(ゆでる料理)「できることを増やそう」				
1 学期			2 学期	
ゆでたまご	ゆで野菜	ゆで野菜サラダ	ごはん	みそしる
材料 たまご 塩	野菜、水	キャベツ ブロッコリー アスパラガス ミニトマト フレンチソース	米、水	水、煮干し、みそ、 油あげ、ねぎ
習得する技能 水からゆでる。 割れないように洗う。	野菜の根元を洗う。 ふっとうした湯で短時間ゆでる。 包丁の安全な使い方	野菜をよく洗う形を揃えて野菜を切るフレンチソースをつくる。(計量)	米の計量 水加減 米の吸水 火加減の調節 むらす	だしをとる 実をよく洗う 実を適切な大きさに切る 実を入れる順序 みそを入れるタイミング

自分でできることを増やす。「してもらう自分」から「できる自分」へ

第6学年(いためる料理)「くふうして、食事づくりに生かそう」			
1 学期		2 学期	
三色野菜の油いため	スクランブルエッグ	粉ふきいも	ジャーマンポテト
材料 にんじん ピーマン キャベツ 油、塩、こしょう	たまご 牛乳 バター 塩、こしょう	じゃがいも 塩 こしょう	じゃがいも、たまねぎ、 ベーコン バター、粉チーズ、 塩、こしょう
習得する技能 ・油汚れの用具と食器の後始末 ・野菜の切り方 ・いためる順序 ・強火、短時間でいためる	・たまごをとき、味をつけていためる ・弱火、短時間でいためる	・じゃがいもの皮むき ・柔らかめにゆでる(水からゆでる) ・粉のふかせかた	・固めにゆでる ・いためる順序

中学校...中学生の1日分の食事の献立を立て、調理できるようになる(肉、魚、野菜のおかず)、調理法(煮る、焼く、いためる)

生活の自立をめざす

資料8 家庭科における題材構成

段階	内容	学習活動	
つかむ	家庭生活を見つめ、課題を持つ。ゴール像の明確化を図る。	家族ウォッチング調査。	家庭実践1
つくる(習得)	調理、製作、実験、観察などを通して、基礎的・基本的な知識及び技能を習得する。 《チャレンジ活動Ⅰ》	調理実習、製作、観察、実験など。	
高める(活用)	身に付けた基礎的・基本的な知識及び技能を活用し、家庭生活の課題から、家族に合わせて創意工夫する。 《チャレンジ活動Ⅱ》	家族への取材 調理実習、製作、観察、実験など	家庭実践2
いかす	・家庭実践の発表する。 ・家庭で実践したことを検証する。 ・家庭実践計画を立てる。 ・状況に合わせて実践したことを活用する学習を行う。 ・題材でできるようになったことを振り返る。	家庭実践の紹介 成長の振り返り	

めに、なるべく実践的・体験的な活動を多くすることが必要となる。

そこで、資料8のように、「つくる」段階で基礎的・基本的な知識及び技能を習得することができるようにする。(チャレンジ活動Ⅰ) また、「高める」段階をその習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用して、家庭に合わせて創意工夫することができるようにする。(チャレンジ活動Ⅱ)

2. 学習過程の工夫

家庭科は、何かの課題に対して問題解決的に学習を進める教科である。そこで、意思決定プロセスと家庭

資料9 問題解決過程と意思決定プロセスの関係

問題解決過程	意思決定プロセス
つかむ (課題把握)	①課題の自覚②情報の収集と分析
つくる (課題追究)	③選択肢や方法の検討④選択肢を多角的に検討⑤決定
高める (練り上げ)	⑥決定の再検討⑦意思決定
いかす (振り返り)	⑧行動⑨評価

科の学習過程とのつながりを資料9のように考える。

これまでのように、「行為とその結果」を追究していても、子どもたちに実践力を育てることはできない。あらゆる状況において、柔軟に対応できるそんな力を育てるためには、問題解決過程の各段階において、「なぜそうするのか」「どの選択肢が最適か」と多角的に検討することにより、子どもたちの思考が鍛えられ、批判的思考を高めることになる。まとめるなら、意思決定プロセスを大切にしたい問題解決では、「行為にいたる過程」を大切にしていく。

3. 教材化の工夫

よりよい家庭生活を主体的につくりだす子どもを育てるために、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる教材と習得した知識及び技能を活用させる教材の2つを考えることが大切になる。

(1) 基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるときの視点 (チャレンジ活動Ⅰ)

題材で、習得させたい知識及び技能を明確にし、それを身に付けさせるのに一番最適な教材を資料10の視点で考えるようにする。

(2) 習得した知識及び技能を活用させるための視点 (チャレンジ活動Ⅱ)

5, 6年の2年間を見通し、資料11の3つの視点をもとに、家庭で活かせる教材を考える。

資料10 チャレンジ活動Ⅰでの教材開発の視点

ポイント1	ポイント2	ポイント3
・子どもたちに身近で、作りたい、解決したいという切実感があること。	・求める知識・技能が確実に身に付く要素が明確に含まれること。	・既習の知識・技能との関連づけがあること。

資料11 チャレンジ活動Ⅱでの教材開発の視点

ポイント1	ポイント2	ポイント3
・身に付けた知識及び技能を選択して使う場面があること。	・家庭や状況に応じて変化可能であること。	・他の場面や製作・調理でも適用できること。

4. 教師の支援の工夫

意思決定プロセスにおいて、子どもたちが批判的に検討し意思決定ができるように、各問題解決過程において、発問の工夫を行う。

○再検討をする場面…「本当にいいですか？もう一度自分の生活や環境のことを考えてみましょう」と発問する。

○評価をする場面…「これまで決めたこと（分かったこと）を友だちに説明しましょう」と行為にいたるプロセスを説明するようにする。

IV. 研究の実際と子どもの姿

○題材名 「くふうしよう 楽しい食事」

(第6学年)

1. 本題材の計画 (全12時間)

1	1食分の献立に関する理解	3
	(1) 朝食の見直し①	
	(2) 1食分の献立の立て方①	
	(3) 1食分の献立を立てる① (本時)	
2	じゃがいもを使ったゆでる調理	3
3	じゃがいもを使ったいためる調理	3
4	課題に合った1食分の献立の調理	3

本題材は、B「日常の食事と調理の基礎」の学習の最終目標である朝食の「1食分の献立」を立て、簡単なおかずをつくる学習である。これまで学習した「ゆでる」「いためる」の技能を活かすところである。

2. 本実践のねらい

- 米飯とみそ汁を中心とした1食分の献立で主菜と副菜の2品を工夫し、3つのグループの食品の組み合わせにより栄養のバランスのよい食事になる活動の在り方を具体化すること。
- 1度決めた献立を3つの食品グループに食品を分けることにより、家族への取材の情報やGTのアドバイス、友達への献立の工夫により見直し、最終決定を行う活動を学習過程に位置付ける在り方を明らかにする。

3. 本時の教材について

(1) 料理サンプル

① これまでの実践の反省から

1食分の献立を立てるとき、主菜と副菜を考えることになるのだが、子どもたちには、主菜や副菜の量や料理には大切な見た目(色どり)など具体的なイメージが持ちにくかった。

② 料理サンプルを使う価値

今回、朝食の1食分の献立を立てるとき様々な料理

資料12 料理サンプルの価値

- ① 1食分の献立をイメージしやすい。
- ② 量感をつかみやすい。
- ③ 色どりを確かめることができる。
- ④ 変更が可能である。

サンプルを使う。料理サンプルの価値は、資料12の4つが考えられる。どれくらいの量が適当なのか分かりやすくするために、主菜80g、副菜20gにし、実物大の大きさのサンプル(写真と実際の料理)を準備する。

《目的》

1食分の献立を立てやすくするため。

《内容》

米飯とみそ汁(実は、油揚げとねぎ)に合う栄養のバランスと色どり、味のバランスを考えた主菜と副菜を決定する。

《方法》

学習プリントの中にご飯とみそ汁と大きなお皿を1枚(実物大)の写真を準備する。次に、主菜になる材料を選び、調理法を考える。このとき、材料は、一人分の量を準備する。また、実際に出来上がった料理と写真の2つを準備する。こうすることで、1食分の献立における一人分の量が分かりやすくなるからである。主菜になる材料を決め、調理法を考えて副菜を決めるようにする。また、1度、1食分の献立を決めて、栄養のバランスや色どり、味のバランスを考え、料理を変更したり、材料を付け加えてつくったりする工夫ができるようにする。

③ なぜ朝食の1食分の献立なのか

子どもたちが、これまでに学習したご飯及びみそ汁、「ゆでる調理」「いためる調理」の技能から考えて、3食の中では、朝食が一番適切であると考えた。

(2) 朝食のおかず

子どもたちが習得した技能、使用した材料を考慮したのが、資料13のような考えられる朝食のおかずである。

ここでいう主菜とは、たんぱく質を多く含む食品であり、卵・ウインナー・ハム・ちくわ・豆腐・納豆などである。副菜は、主にビタミン・ミネラル、食物繊維の供給源になるもので、野菜・きのこ・いも・海藻料理などである。この2つの違いを理解した上で、主菜のメインになる材料と調理法を選択し、副菜を考えるようにする。

このときに、朝食のおかずを選ぶ観点は、既習でもある以下の3つである。

- 栄養のバランスがとれていること。
- 短時間でつくれること。
- 後片付けが簡単であること。

家族の朝食の好み、自分のつくりたいものや食べた

資料13 考えられる朝食のおかず

主菜	たまご	焼く	オムレツ
			目玉焼き
			ハムエッグ
	ウインナー	いためる	スクランブルエッグ
			ウインナーとキャベツの炒めもの ウインナーエッグ
	ベーコン	焼く	野菜のベーコン巻き焼き
いためる		青菜とコーン、ベーコンの油いため ジャーマンポテト	
野菜	いためる	三色野菜いため	
副菜	青菜	ゆでる	青菜のごまあえ
	じゃがいも	ゆでる	粉ふきいも
	ツナ		ツナサラダ
	野菜		ゆで野菜サラダ
	ミニトマト		
	レタス		

資料14 本時での意思決定プロセス

段階	目的	方法
つかむ	課題の把握をするため	必要な情報の収集
つくる	様々な情報の中から自分の目的に合ったものを選ぶため。	ある場面を想定したシミュレーション
高める	適切な決定をするため。	批判的に再検討をし、最終決定
いかす	結果を評価をするため。	観点を設けて自己評価

いものから子どもたちは、選ぶことになると考える。
1回目選んで、野菜が少ないという課題をもったならば、GTの栄養教諭にオムレツやスクランブルエッグの中に野菜を入れることをアドバイスしてもらうことにする。

このように、主菜になる材料と調理法を考え、副菜を考えていくという流れは、今後の子どもの生活において活用することができるものである。また、一つ一つの材料の量感や1食分の献立を色どりで考えていくこともこれから料理をつくるときに用いることができるものである。

(3) じゃがいもを使った理由

これまで2年間、学習してきた「ゆでる」「いためる」調理のどちらとも技能を使うことができる材料である。また、包丁による皮むきの技能を習得できる。さらに、1年中、子どもたちの身近にあり、比較的安い値段で購入することができる。

これらのことから、じゃがいもや野菜、たまご、加工食品を使った料理(資料13)を考えた。

4. 本時の指導過程

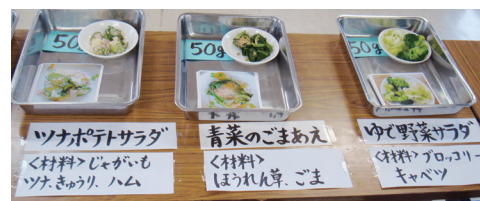
資料14のような流れで、意思決定プロセスを考慮した学習の流れを考える。

本時の学習過程である。

学習活動	
つかむ	<p>1 自分の課題からご飯とみそ汁に合うおかずを考え、どうすればバランスがよくなるのかというめあてを話し合う。</p> <p>野菜が不足しているよ。栄養のバランスが悪いな。栄養のバランスがよくないな。どんな組み合わせがいいの？</p> <p>どうやったら、栄養のバランスのよい2つのおかずの組み合わせになるだろう。</p>
つくる	<p>2 料理サンプルからつくりたいおかずを選んで朝食の1食分の献立のシミュレーションを行う。</p> <p>○栄養教諭より、1食分の献立の立て方の話を聞く。</p> <p>《GTの話の内容》・主菜と副菜の違い。 ・主菜を決めて副菜を決める。 ・多くの食品をとること。</p> <p>○材料と調理法を考えてビュッフェ形式で置かれた料理サンプルを皿に取り、1食分の献立のシミュレーションを行う。</p>
高める	<p>3 栄養のバランスを確かめ、友だちと話し合い、栄養教諭のアドバイスをもとに1食分の献立を見直し、意思決定する。</p> <p>○選んだ料理サンプルに使われている食品を3つの食品グループに分けて栄養のバランスを確かめる。</p> <p>○栄養のバランスがいいかという視点で自分の立てた献立の再検討し、1食分の献立を決定する。</p> <p>○どうして、そのような献立にしたのかを選んだ過程を友だちに説明する。</p> <p>2つのおかずの組み合わせ方は、主食に赤、副菜に緑の食品を選び、調理すれば栄養のバランスのよい1食分の献立になる。</p>
いかす	<p>4 今日の学習を振り返る。</p> <p>《評価の視点》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思で決めることができたか ・自分の課題から決めることができたか。 ・家族や環境のことを配慮したか。

5. 授業の流れ

(1) 場の工夫



写真のように、実物の量のおかず(主菜80g、副菜20g)と写真をビュッフェ方式で準備した。こうすることで、子どもたちは、具体的に1食分の献立を立てやすくなる。教室の後ろに主菜と副菜のコーナーを準備し、そこから選べるようにした。

(1) つかむ段階

自分の朝食の課題を把握するために、まずは、ご飯とみそ汁に合う主菜と副菜を選ばせた。なぜ、そのおかずを選んだのかを理由を書かせた。すると、家族へのインタビューで得られた情報やこれまでの経験から

おかずを選んでいることが分かった。「自分の好きなものばかり選んだので、栄養のバランスが悪い」「野菜が少ない」などの課題があった。また、「どんな順で主菜と副菜を選んだらよいか分からない」という主菜と副菜の選び方が分からないということや「栄養のバランスをよくするにはどうすればよいか」という意見が出された。

(2) つくる段階

栄養教諭から、主菜を選んで副菜を選ぶこと、なるべく多くの食品をとることを話してもらった。次に、材料と調理法を考えてビュッフェ形式で置かれた料理サンプルを皿に取り、1食分の献立のシミュレーションを行い、決定した。



こうすることで、子どもたちは、自分の課題から具体的に1食分の献立を立てることができた。



(3) 高める段階

まず、選んだ料理サンプルに使われている食品を3つの食品グループに分けて栄養のバランスを確かめた。すると、主菜は、赤のグループになり、副菜は緑のグループになることに気が付くことができた。



次に、自分の課題を見直し、批判的に自分の献立を検討し、再検討を行った。ここで、批判的に検討できるようにするために、教師が、「自分の課題と家族のことを考えて、本当にそれでいいのか、もう一度検討してください」と発問した。子どもの中には、「やっぱり、緑のグループが少ない。どうすればいいのだろう。」と疑問に思った子どもがいた。そこで、栄養教諭に「スクランブルエッグの中に、たまねぎや人参、コーン、アスパラガスなどを入れていっしょに炒めるとたくさん野菜が摂れるよ」とアドバイスをもらい、1食分の献立を決定することができた。



最後に、どうして、そのような献立にしたのかを選んだ過程を友だちに説明した。

(4) いかず段階

ここでは、今回の意思決定における自己評価を行う。評価の観点は、資料15である。よりよい生活を主体的につくり出すためには、自分の課題から自分の意思で決定するだけでなく、家族や環境のことを考えた意思決定をすることが必要になる。そこで、資料

資料15 評価の観点

- ・自分の意思で決めることができたか
- ・自分の課題から決めることができたか。
- ・家族や環境のことを配慮したか。

資料16 家庭実践後の子どもと保護者の感想

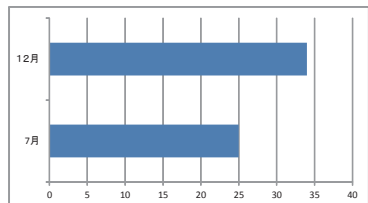
保護者のコメント	分かったこと 気付いたこと
①野菜の切り方がとても上手で野菜の甘みがよかったです。 ②主婦が野菜の下準備も出来てお料理が楽に出来るので、これからこれを利用して家族の食事の準備も楽にしたいです。 ③洗いからスコンロの上で野菜を炒めていくのが、野菜の栄養が逃げない感じが良かったです。	私は、家族みんなが喜んでくれたのが一番うれしかったので、これから、これをいかして家族、やさそばなどを作ってみたいと思います。
題材を終えての感想	
私は、この題材を学習して料理はみんなを笑顔にさせる楽しさを感じました。そして、笑顔にさせることを学んだのがこれからは、私がいかに料理を作ってみんなを笑顔にしたいかと思っています。みんなが笑顔になるのが私の楽しみです。	
有てきな気がしてすわ!! 涙が出てきた!!	

15の観点で自己評価を行った。

6. 全体考察

- 資料16のように、子どもは、家庭実践をしたことを両親と姉にコメントをもらい、大変喜んでいることが分かる。また、他の料理にもチャレンジしたいという次への意欲も高まっていることが分かった。

- 日常生活において、何か家庭実践をしている子どもは、本実践を終えた時には、何かを続けている子どもが増えた。それは、家族に喜んでもらい、家族の一員であるという気持ちを味わうことができたので、もっと何かしたいという思いが強くなったからだと考える。



- 家庭の様々な状況に合わせた創意工夫する能力を育成する必要がある。こうすることで、子どもたちは、あらゆる状況に応じて柔軟に実践する態度を育成することができる。と考える。

V. 引用・参考文献

- 「小学校学習指導要領解説家庭編」 文部科学省
- 「中学校学習指導要領解説家庭編」 文部科学省
- 初等家庭科教育法 ミネルヴァ書房 加地芳子編著
- 小学校家庭科概論 ミネルヴァ書房 加地芳子編著
- 家庭科教育における意思決定能力 家政教育社 佐藤文子編著
- パワーアップ家庭科 大修館書店 荒井紀子編著
- 生活主体を育む ドメス出版 荒井紀子編著
- 新しい問題解決学習 教育図書 荒井紀子編著